Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-10

第1章 第11回歴史文化をめぐる地域連携協議会 : 「地域史を調べること学ぶこと : 目的と支援を問い直す」

坂江, 渉 ; 大国, 正美 ; 大槻, 守 ; 久斗, 政光 ; 吉田, ふみゑ ; 増田, 政利 ; 小来栖, 賢治 ; 海部, 伸雄 ; 岸本, 道昭 ; 石松, 崇

(Citation)
歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業,11(平成24年度事業報告書):1-24

(Issue Date)
2013-03-31

(Resource Type)
report part

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005269

KOBE UNIVERSITY

第1章
第11回 歴史文化をめぐる地域連携協議会
「地域史を調べること学ぶこと
―目的と支援を問い直す―」

日時：2013 年 2 月 2 日（土）
11:00 ～ 17:30
場所：神戸大学文学部 B 棟 331 号室
主催：神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター
後援：兵庫県教育委員会、たつの市教育委員会、香美町教育委員会

《当日のスケジュール》

主催者挨拶（藤井勝・人文学研究科長）11：00 ～
趣旨説明（奥村弘･神戸大学地域連携推進室長）
報告① 11：20 ～ 11：50
・大国正美氏（神戸史学会）
「地域史研究の意義と課題 –神戸史学会 50 周年と落合重信–」
報告② 11：50 ～ 12：20
・坂江渉（神戸大学大学院人文学研究科）
「大学も関与する地域歴史文化継承事業の新しい動き」
12：20 ～ 13：20 昼食・交流会
報告③ 13：20 ～ 13：35
・大槻守氏（香寺町史研究会）
「大字誌づくりを目指して」
報告④ 13：35 ～ 13：50
・久斗政光氏（三木市旧玉置家住宅文書保存会）
「市民グループによる襖の下張り文書作業と活用」
報告⑤ 13：50 ～ 14：05
・吉田ふみゑ氏（常民学舎）
「文化サークル「常民学舎」と歴史民俗誌『Sāla』の歩みとこれからの活動」
報告⑥ 14：05 ～ 14：20
・増田 政利氏（網干地方史談会）
「史談会と学校教育 –網干地方史談会の取り組み–」
14：20 ～ 14：50 交流会
報告⑦ 14：50 ～ 15：05
・小栗栖健治氏（兵庫県立歴史博物館）
「ひょうご歴史文化フォーラムをめぐって」
報告⑧ 15：05 ～ 15：20
・海部伸雄氏（淡路市立青少年センター）
「地域の歴史文化を生かした教育活動の展開 –淡路市立育波小学校の実践–」
報告⑨ 15：20 ～ 15：35
・岸本道昭氏（たつの市教育委員会）
「地域と学校と行政が連携した歴史文化遺産への学びと活用 –たつの市「堀家住宅」での取り組み–」
報告⑩ 15：35 ～ 15：50
・石松崇氏（香美町教育委員会）
「香美町の歴史文化を引き継ぐために –ふるさとマップ作り–」
15：50 ～ 16：00 休憩
総合討論 16：00 ～ 17：30

はじめに

人文学研究科地域連携センターでは、各年度末に、1 年間の活動を集約する意味をこめ、県内の自治体職員・市民団体代表者・大学関係者を集め、歴史遺産の保存・活用について議論する連携協議会（コンファレンス）を開催している。 11 回目となる今年度は、「地域史を調べること学ぶこと ―目的と支援を問い直す―」というテーマで開催した。

そもそも郷土や地域の歴史を調べ学ぼうとする人びとの活動は、古くから盛んである。戦前は「お国自慢」的に郷土を誇ることが中心だったが、戦後は必ずしもそうでない方向性をもった地域史研究団体などの活動が始まった。そこでは、身の回りの生活を見つめ直し、社会改善を志向する活動も全国的に広がった。ある調査によると、現在でも全国には 2000 以上の郷土史・地域史研究団体があるという。

ところが近年、どの団体でも会員の高齢化や減少により会誌や通信の発行が不定期になり、あるいは休会、解散の危機に追い込まれるなどの困難に直面している。これまでのこうした地域を調べ学ぼうとする人びとの営為を未来につなげることが重要な課題となっている。

一方、近年、新たなアプローチの仕方で地域の歴史文化に関わる動きもでている。たとえば、兵庫県では、自らの生活する地域固有の歴史文化を掘り起こし、それを若い世代へ継承する目的で大

字誌を作成したり、小学生を対象とする社会教育に力を入れる動きが盛んである。また新住民と旧住民の別にこだわることなく両者が一緒になって地域歴史文化を調べ直す開かれた活動（地域マップづくり、地域資料のミニ展示会）がみられる。さらに、襖の下張り文書剥がし活動などを通じ、地域の歴史文化に親しむなど、多様な接し方が現れて、その可能性が注目されている。

戦後盛んになった地域史研究団体の活動と近年の新たな動きは、時代状況や取り巻く環境、担い手も異なるが、未来志向や身の回りの生活へのまなざしなどの点で共通するところがある。それぞれの成果や課題をともに考える手がかりがあるように思われる。

また、新しい動きを促し持続させていくにあたっては、行政や大学が大きな役割を果たしている。このように、人びとが自覚的なまちづくりの担い手となるためには、地域の歴史文化を自主的に調べ学ぶ人びとの営為を、行政や大学が支援することが重要である。

そこで、今年度の協議会のテーマを「地域史を調べること学ぶこと―目的と支援を問い直す―」とした。地域史をめぐる人びとの活動や、それを支える環境の構築などの諸課題を考えることを通じて、地域歴史文化の形成・継承のために、大学・自治体・市民が連携し、何をすべきなのか、何ができるのかを考えることをその目的にした。

なお毎年開いている地域連携協議会は、地域歴史文化に関わる方々の相互交流の場としても位置づけている。今年度も協議会の間に時間をとり、各団体の方々が交流できるコーナーやポスターセッションの場を設け、参加者同士の親睦と交流を深めることができた。

以下、当日の報告内容については、それぞれの報告者による要旨を掲げ、また総合討論は録音データを掲載した。当時配付された図版データ等は本書には載せていない。詳細は神戸大学学術成果レポジトリー http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/を参照していただきたい。

当日の参加者は、兵庫県内の自治体・大学関係者や住民団体の代表者など、合わせて 79 機関 109 名にのぼった。これまでの地域連携協議会で最高の参加者数になった。総合司会は、人文学研究科教員の村井良介と板垣貴志がつとめた（以下、敬称略）。　　（文責・坂江渉）

報告①

地域史研究の意義と課題 -神戸史学会50周年と落合重信-

大国　正美氏
（神戸史学会）

神戸史学会創設者落合さんと戦争体験

「神戸史学会」は昨年 50 周年を迎えた。神戸に市民社会の実現をめざした「市民同友会」（1948 ～ 1993）の活動から芽生えた団体である。市民同友会は 1947 年神戸市長田区の市営住宅の住民たちが作った「むろうち文化協会」が前身で、例会や見学会を 1 年半で 35 回重ね、講師派遣、書道教室や洋裁講習、合唱練習など多様な活動を経て市民同友会に発展した。教養を高め文化の向上、あるべき市民社会の確立が狙いだった。神戸史学会は 1962 年に市民同友会の会員 400 を母体に発足、年 2 回の「市民同友会手帖」を「歴史と神戸」年 4 回に変更、印刷費を「市民同友会」が広告で賄い、会員に配布したのである。創立者の落合重信さんは「歴史に不得手」なのに 1958 年神戸市史編集室に勤めることになり、必要に迫られて発刊したと書いているが（「歴史と神戸」119 号「学歴ナシ」）、私は別の側面もあったと考えている。

落合さんは、1912 年、三重で生まれ、3 歳で神戸に来た。1918 年神戸市兵庫区で米騒動を体験、「スラム街であったが、私たちのいた小路からは当夜出かけたものはなかったように記憶している。あの群衆にも多少の地域性があったのではなかろうか」（「歴史と神戸」16 号「代々貧乏ぐらし」）と書いている。そして米騒動の体験は「歴史と神戸」の創刊号の特集へとつながっていく。

話は戻るが、落合さんは病気のため県立三中を 3 カ月で中退したあと、信用組合で給仕をしながら県立夜間中学を卒業、図書館勤務を経て大政翼賛会の文化担当者として県内の組織作りに関与、1945 年兵庫区で空襲に遭った。戦後も困窮生活の中、1950 年兄の落合長雄さんと神戸の小

字収集を開始、これがきっかけで古代条里の復元研究を始めた。旧神戸市史を執筆した一級の学者、喜田貞吉の説の誤りに気付き、地に足のついた歴史研究の可能性を体現することになる。

落合さんは 1958 年神戸市史編集室に勤めるようになって「歴史と神戸」を発刊したと書いているが、それに先だって 1956 年に雑誌「市民評論」を刊行している。この雑誌の末尾に「戦争の落とした影が、私のうちからなかなか消えない。戦争中、翼賛会というようなところへ積極的に奉職したりした経験のためかもしれない。今の自分のものの考え方というものは戦争を抜きにしては考えられない」と吐露している。米騒動と銃後の戦争体験が、歴史研究と深く結びついていたのである。

近現代史・生活史・市民参加の新機軸

落合さんがめざしたものが「神戸史学会綱領」に端的に書かれている。地方の歴史研究は「あまりにも保守的にすぎたようです。歴史研究は過去のことを調べることによって、未来への展望を可能とする進歩的なものでなければならない」「神戸の歴史研究をもっと身近かなものにするため、わたくしたちが現に存在する開港以後の現代史に主点をおき」「現在のルポルタージュもふくめ」「学術的価値あるものにすることを念願しますが、それと同時に、多数の市民が参加する『生活の中の歴史』を書きしるしてゆく」とも宣言しているのである。

1905 年発足の「神戸史談」との違いを意識し、創刊号は神戸の米騒動特集、その後も終戦、明治維新など近現代史に軸を置いた。郷土史研究に対し「郷土史が古いところしか扱わないとなると、ますます一般社会から相手にされないものになっていくおそれ」（「歴史と神戸」132 号編集後記）と警鐘を鳴らしている。

学術的でありながら市民が参加する「生活の中の歴史」を標榜したのもユニークだった。「乗物の中でもゆうに読める文章」への自負と「研究者仲間だけの雑誌」を批判している（「歴史と神戸」78 号「郷土史研究誌ということ」）。1964 年に専門家である大阪歴史学会近代史部会の小山仁示さんらと連携して特集を組んだが、アカデミズムの議論とは無縁で、労働運動史や社会運動史に限定しないテーマ設定をした。

同時に資料公開にも取り組み、1968 年には明治５年までの貿易統計表だけで「歴史と神戸」を編集、「てんから読めない」と自己批判しつつ「郷土史を研究するための資料を共有財産とする」「研究者が育ってきている」と市民の支えによる資料公開や市井の研究者要請への理解を求めている（前掲「郷土史研究誌ということ」）。

落合さんの研究の背景は、生活と結びついた歴史研究であり、戦争体験や底辺の暮らしと民衆の正当性をさぐる、いわば生き方を探るベクトルとしての歴史研究であった。市民同友会で培われた思想性が背景にしっかりあったのだと思う。

落合さんがめざした方向を再評価する必要があると思う。「答え」や「結果」ではなく「問い」を見つけ、市民目線で地域の課題の掘り起こす地域史研究である。「官学」が市民と平等な立場での参画が重要で、そのためには、地域史研究者とその団体が「官・学」からの支援を受けつつも、対等なパートナーとして自律した目的意識を持つこと欠かせない。

報告②

大学も関与する地域歴史文化継承事業の新しい動き

坂江　渉
（神戸大学大学院人文学研究科）

報告では、大学も関与し、かつ一定の前進をみせている県内各地の団体や地域の取り組みについて、いくつかの特徴にわけて紹介した。

一、地域社会に根ざした活動

1 つめのもっとも大きな特徴は、成功をおさめつつある団体は、いずれも地域社会との結びつき、とりわけ大字（旧村、区・財産区）との結び

つきをもって展開されている点がある。報告では、その例として、丹波市春日町の棚原地区や宝塚市の山本地区での古文書や絵図を活用した活動を紹介した。

また大字単位の事例だけでなく、ニュータウンの住民が、引っ越してきたまちの歴史をもっと「知りたい」「学びたい」という強い欲求をもっており、それを拾い上げた自治体の取り組みも存在する（三木市・たつの市など）。

二、身近な歴史文化の掘り起こし

2 つめとして、地域内の指定文化財のみならず、古文書・絵図・古写真・景観、習俗等、生活に密着した歴史資料や地域遺産を掘り起こし、それを学び取ろうとする動きがある。その際、それを援助する大学側のスタンスとしては、単に「答え」だけをする出すのでなく、それに至るプロセス、すなわち歴史資料等から読み取れる様々な可能性、「資料への問いかけ」を重んじる姿勢をとっている点を指摘した。そうすることにより、「調べ学ぶ」ことの面白さや、学問的広がりも感じられると考えるからである。

報告では、そうした具体例として、三木市やたつの市での「襖の下張り文書」の解体・整理・分析活動を詳しく報告しておいた。

三、学び取った成果を次の世代につなげる努力

この間の取り組みや新しい動きの 3 つめの特徴として、成果物のアウトプット、すなわち「調べ学んだ」成果をそのままにしておくのではなく、それを若い世代に引き継ごうと努力されている事実が多い点を指摘した。やり方としては、「大字誌」や冊子つくり、地元でのミニ展示会、大字歴史マップの作成やバーチャル博物館の立ち上げなどがある。

そのような活動をつづける担い手たちに話を聞くと、「いま誰かが地域の歴史文化を記録に残さなければ、永遠に消えてしまう」「何とか村の文化を若い人たちに伝えて行きたい」という答えが返ってくることが多い。

過疎化や高齢化等により、大字や地域社会の「足腰」が弱まりつつあることへの危機意識の現れであり、歴史文化の継承活動は、そのもとでの潜在的な前向きのパワーの顕現だといえるだろう。

四、行政のはたす役割の大きさ

そうした担い手の方々の姿をみると、すべての場合、楽しく活動されているのが基本であり、また閉鎖的ではなく、可能な限り、仲間づくり（新旧住民の交流など）をしようとされているのが大きな特徴である。

この点で活動の持続性を維持し、さらにこうした取り組みそのものを増やして行くためには、各自治体の果たす役割が大きいと思われる。もはや指定文化財の保護・活用だけに頼る自治体行政には限度がある。住民たちによる、上のような活動を支援し、またそうした潜在力を引き出すような取り組みや「文化財」行政をすすめることが不可欠である。

今回紹介した動きは、兵庫県内全域でみると、ほんのわずかな事例にすぎない。全県規模でそうした活動を支え、力を引き出す自治体が生まれて行くことを望むばかりである。

報告③

大字誌づくりを目指して

大槻　守氏
（香寺歴史研究会）

はじめに

香寺町史編纂を通じて感じたことはムラ社会の崩壊という現実であった。ムラ社会の基盤である農業が、兼業化と農機具の大型化につれて農家の手から離れていくようになり、農業中心に営まれてきたこれまでのムラの生活文化は忘れられ、伝える力も衰退している。そこで、何とか地域の歴史文化を記録し伝えようというのが大字誌の編纂であった。大字誌の編纂は、ただ記録するだけでなく、現実の生活を見直すことで地域の再創造である「まちづくり」につながるとも考えている。

大字誌の編纂は全国各地で行われているが、ことに沖縄での取り組みが盛んであると知った。戦火で全てを焼き尽くされた村々が記憶と聞き取りをたよりに編纂されていることを聞き、励まされた。

１．香寺町史『地域編』の編纂

1988 年に始まった香寺町史の編纂は通史編・地域編（上下）・資料編全 4 巻の予定であった。地域編は大字誌の構想で始まっている。そのため各集落（大字）から町史編集協力者を募り、編纂に着手した。町内には 20 集落と 5 自治会（新興集落）があった。どの集落でも町史協力者を中心

に支援の輪が広がり、自分達のムラの歴史を書くという経験をした。その成果が当時『ムラの生活史』全3冊として公刊されている。しかし、限られた編集期間では大字誌の完成は困難であったので、最終的には集落（大字）単位でなく、山手・台地・川手の3地域区分での編集となった。大字誌の編纂はこの未完となった地域編を引き継ぐものであるともいえる。

2011 年の町史完成シンポジウムでは、今後の町史活用を進めるための 4 本の柱を発表した。（1）大字誌編纂、（2）香寺歴史研究会の活動、（3）ムラの史料を読む、（4）歴史遺産の保存の 4 つであり、ここでも大字誌の編さんが筆頭に挙げられている。

２．香寺歴史研究会の活動

大字誌を編纂するのは地域住民であり、その動きを絶やさないためにも歴史研究会の活動は不可欠である。町史『村の記憶　地域編』の完成を受け、2004 年、これからも地域の歴史遺産に関心を持ち続けようと、町史協力者を中心に結成したのが香寺町歴史研究会である。目標の一つは地域編を発展させて大字誌を完成させることであった。その後、姫路市への合併に伴って再発足したのが 2006 年で、香寺歴史研究会と改称した。研究を発展させるために地道な調査研究活動を継続し、2007 年には『香寺町の石造物』、2008 年には『香寺町の年中行事』を完成させた。石造物では町内の悉皆調査をし、未調査のご神体が貴重な中世の作であることが判明して、地元で大きな関心が持たれた。また、墓碑等の調査から町内に寺子屋が 10 ヶ所はあったことが明らかになった。このように調査をすることで地域の歴史が少しずつ現れてくることに意味があると考えている。

3. 大字誌の編纂

大字誌の編纂を具体的に呼びかけたのは、『年報　香寺町の歴史』創刊号（2007）の「集落誌を作ろう！」という文献紹介である。県内外の大字誌の例を紹介し、『村の記憶　地域編』という成果をあげた私たちには大字誌が作れると呼びかけ、その動きが各集落で高まることを期待している。

最初に大字誌を完成させたのは相坂自治会であった。その実践を紹介するとともに、町外（福崎町・神河町）からも報告してもらったのが地域連携センターとの共催第1回フォーラム「大字誌をつくる」（2011．2）である。さらにその年 7 月、編纂に着手しようとしていた4集落で大字誌勉強会を開いた。本年2月には第2回フォーラムを予定しており、岩部・土師の実践報告を予定している。現時点で、編纂中はこの岩部・土師と田野の3集落である。

おわりに

大字誌のねらいは住民参加の地域史である。ムラ共同体の崩壊の後にどのようなコミュニティーが生まれるのか。それはまだ分らない。が、少なくとも、この地域の中で新しい関係を作り出していく以外にない。大字誌はかつてのムラとそれが激変する姿を映し出している。人々はそこから何を残し、何を伝えるかを考えることで、進むべき未来に思いをはせるのではないだろうか。

報告④

市民グループによる襖の下張り
文書作業と活用

久斗　政光氏
（三木市・旧玉置家住宅文書保存会）

１、旧玉置家の紹介

初めに、私達が下張り文書の剥離作業を行っている旧玉置家住宅について簡単に紹介しておきます。旧玉置家は三木を代表する建物で 180 年がたっています。平成 13 年に玉置氏から三木市に寄贈され、旧玉置家住宅となりました。翌年、平成 14 年に国登録有形文化財に登録され平成 21 年にリニューアル工事を行い現在に至っています。

2、下張り文書とはどのようなものか

皆さんは、下張り文書と言う言葉をご存じと思います。和紙が大変貴重な時代に不要となった大福帳や手紙等を利用し襖の下地に貼られていました。下張り文書は、普通一般には、襖、屏風の中にあるために、我々は普段見ることほとんどないと思います。

だからこそ、焼却や廃棄処分にされず今でも貴重な資料として、残っているのだと思います。私達が作業している、旧玉置家も襖も屏風も昔のまま残っています。

本来なら廃棄処分にされていたかも知れない古

文書でしたが襖の下張りとして利用されていたため、貴重な資料として現在も残っているのです。郷土の貴重な財産だと思います。襖や、屏風等の下地に貼られた古文書のことを下張り文書と呼んでいます。

３、下張り剥離作業の始まり

平成 21 年に旧玉置家住宅のリニューアル工事の前に同家所蔵の貴重な襖や額、書籍・書簡類及び民具類が多く残っており、その整理と保存作業を手伝いました。その時、その場に一緒におられた文化財修復家の尾立先生から襖の下張りに貼られている古文書をはがし、解読することにより、貴重な歴史や風俗を知ることができる文化遺産であることを教わりました。

その後、市の担当者から「旧玉置家の襖の下張り文書の剥離作業を郷勉会の活動としてやってみてはどうか」とお話があり、尾立先生に相談し、板垣先生に御指導をお願いし、襖の剥離作業に挑戦することに決まりました。

それから平成 21 年 10 月から平成 22 年 2 月まで、みの川会館の 2 階で尾立先生のご指導を仰ぎ初めての襖の下張り剥離作業を始めました。これが私達が襖の剥離を始めたきっかけです。

このように市民ボランチアが中心になって剥離作業に取り組んでいる所は珍しいということです。

４、保存会の活動

私達は、お忙しい先生に沢山の技法を学び貴重な資料、文献を末永く後世に残し保存して行く為に、市民ボランチア又は三木市高齢者大学大学院の郷勉会の皆様と一緒に、平成 22 年 3 月に「旧玉置家住宅文書保存会」を立ち上げました。会員数は下張り剥離グループは約 10 名また、解読グループは約 5 名合計約 15 名です。剥離グループは、その道の、専門家の尾立先生に又解読グループは神戸大学の板垣先生にご指導をお願いしています。

私達は恵まれていて、活動拠点を旧玉置家の奥座敷 8 畳の間を使用させていただく事になりました。冷暖房完備、作業台 2 台、剥離した文書の保存場所も確保していただきました。現在までに旧玉置家の約十枚の襖の下張りから剥離された資料は約千点以上に及んでいます。その資料の中から江戸時代の帳簿や薬の処方箋、往来手形などが発見されています。

５、作業風景の新聞記事

次の写真は最初のころの、神戸新聞の取材の記事です（写真については神戸大学学術成果レポジトリー http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/を参照。以下同じ）。向って左の写真は　平成 21 年に、みの川会館で下張りの剥離作業の開始した時の記事です。右の写真は、平成 22 年に旧玉置家での剥離作業の記事です。

６、剥離作業グループの状況

下張り文書の剥離作業日は毎月第 1・3 の水曜日、午前 10 時 30 分～午後 3 時迄です。

①記録用紙作成･･･作業者名（作業した人全員記入）部屋番号・襖番号・襖の裏表等を記録する。

②記録写真･･･（襖全体歪まないように）天と地を確認して、ピンボケならないように撮る。

③見取り図作成（スケッチ）･･･各文書の番号・紙の重なり状態・破れ具合の特徴・虫食い等をスケッチする。

④剥離作業についての注意

下張り文書の多くは一度処分された紙です。購入先は不明です。文書はばらばらですから一字一字が大事です。破らないように、剥離する場合は一枚一枚、竹ベラやピンセットで丁寧に正確に剝がしてゆきます。又、大福帳や日記類は閉じ紐の跡があります。穴の跡は潰さない事、大福帳や日記は、ばらして、別々に貼られている可能性がありますので、復元するのに時間と努力がいりまが、私達は大福帳を復元しました。

⑤番号ふだの確認･･･各層ごとに貼る

⑥整理・保存･･･はがした文書を整理して、保存する。（水で湿らした場合は完全に乾かす）

以上の作業がかかります。

7、解読作業グループ状況について

解読の作業日は毎月第 1・3 の金曜日の午後 1 時から午後 4 時迄です。

剥離された資料は一般には読めないくずし文字で書かれていることが多く、解読作業にはそれなりの読む知識・経験がある方でないと、容易に読む事が出来ません。ベテランでも解読困難な文書は神戸大学の板垣先生のご指導を仰ぎながら、解読作業に当たっています。

①目録作成／文書の題・年号・著者名等を書き込む。

②目録入力／パソコンに入力する。
③データを保存する。以上の作業をします。

８、下張りから発見された文書

この 2 通は、さつま芋を植えるように、仰せつけられた高男寺村（三木市）の庄屋が書いた願い書きの下書きかと思われます。・
資料 1･･･享保 18 年の年号があります。高男寺村では、畑、三畝にさつまいもを植えるつもりであった事が解ります。又、この地域では、稗や麦などの雑穀が日常食となっていたこともうかがえます。
資料 2･･･試みの結果が記されています。昨年の秋にさつま芋を植えるように仰せつかり、冬には種イモを用意し大切に保管していたけれども、腐ってしまい、明石や兵庫津を始め方々探したが種イモは入手できなかった様子がかかれています。

９、「切支丹宗門御改ニ付禅宗紛無御座宗旨証文之事」

この文書は、地蔵寺の住職・大器（のち玉置家の初代となる）が、明石藩の宗旨奉行矢木源八郎に対し。キリスト教徒に対する禁制を守ることを証明する内容です。

10、櫃の中から三木の歴史に残る染め型紙を発見

形屋は、紺屋が使う染の形紙を作る職人です。江戸時代から大正時代の約 240 年間、三木の町の隆盛を誇つていた形紙の一部だと考えられます。現在形屋は衰退してしまいましたが、歴史を知る貴重な資料となります。三木の古文書には、いがいにも鍛冶屋よりも多くの形屋が古くから活躍していた記録が残っています。

11、下張り作業展

保存会の活動は、誰でもが自由に見学できるように一般公開をしています。毎年 1 年間の下張り作業で発見された古文書や旧玉置家住宅文書保存会が活動した取り組みを一般の方々に展示し、発信しています。1 回目は平成 23 年 2 月 20 日。2 回目は平成 24 年 2 月 19 日に開催しています。
3 回目は平成 25 年 3 月 3 日の開催予定です。

今後の展開

前に述べましたように、私達は三木高齢者大学大学院の同期生で 6 年間共に学び又、遊んできた仲間で、気ごころが解っているからこそ、この 3 年間、やってこれたのだと思います。

勿論、永い年月、意見の食い違いもありましたし、色々の失敗もありましたが、これも、メンバーの心強いチームワークと講師の先生方のおかげで、ここまでやってこれたと思います。

いつも笑いにつつまれ又、どんなときも無理に事を運ばない。自信のないときは、先生に聞く決して無理をして剝さないをモットーに掲げ、文書には、歴史・夢・希望が隠されているとゆう事をメンバー全員が自覚しいます。

又、皆さんは探究心と研究心があります。月 2 回の作業日は楽しみにしています。ここで、私達の下張りの剥離作業は終わってしまうのではないのです。

今後は若い世代にも地元の歴史に目を向け地道ですがこの活動を後世まで伝えて行きたいと思います。この発見された資料は、年一回開催している「下張り文書作業展」において原本とともに解読・解説をつけて、旧玉置家で展示をしています。

終りに、下張り文書の解明は歴史・美術等の貴重な「宝の山」なのです。一歩一歩山を登り一字一字解読し発見して行く地道な作業なのだと思います。この地道な時間のかかる下張り文書の剥離作業は我々市民ボランチイアーグループだから出来るのです。我々市民グループが中心になり、行政を動かし近隣の市町村の市民グループと共にこの日の当たらなかった下張り文書を、日のあたる場所に出してきて郷土の歴史発展の役に立ち一般の方々に広めこの魅力を伝える活動を皆さんと共にやって行きたいと私は思います。

発見された、下張り文書から歴史が変わるかもしれません。

報告⑤

文化サークル「常民学舎」と歴史民俗誌『Sāla』の歩みとこれからの活動

吉田　ふみゑ氏
（歴史民俗誌『Sāla』編集長）

1987 年 4 月に『Sāla』（以下サーラ）を創刊して以来 26 年を経た。この度「歴史文化をめぐる地域連携協議会」で報告させた頂けたことは、サーラ誌とその母体である常民学舎にとって今後の活動に一層の弾みとなったと深く感謝申し上げたい。

27 年前、文化サークル「常民学舎」（会長は難波正司・58 歳）が設立された。播磨一円から

集まった会員は200人余りあったが、わずか1年で半数に減少した。空中分解の危機に陥ったが設立と同時に発行している機関誌サーラを何とか継続しているうちに、普通会員と賛助会員で200名を維持し、定期読者約50名になった。

サーラ誌は、会費・広告代・名刺代・本の売上げだけで、年2回（各500部発行）の印刷代と諸経費を賄っている。地域限定でない自立・自律した数少ない歴史民俗誌として、広域から幅広い読者を得ている。会員の交流は、主に、植物の観察会とサーラで掲載した論文の現地を訪ねる1日バス旅行を春秋4回開くことで図っている。講師は環境カウンセラー・森林インストラクターの藤原正人先生、庭園研究家の西桂先生、石造美術研究の三浦孝一先生が受けて下さっている。こういった行事に参加しない会費だけの会員も多く、その方々に還元でき、繋がるサーラ誌の役割は大きいと考える。誌上への書き手と読み手の関係が相互援助になる本を目指して、親しんで手に取ってもらえるよう心掛けてきた。いかにも歴史民俗誌といった装丁でなく、身近で心安らぐ小動植物や風景の写真で表紙を飾り、文字をぎりぎりまで大きくし、写真・図版を多く入れてレイアウトしている。また、「編集部便り」は本文に興味を向けてもらえるように著者のエピソードや、関連性のあることを紹介している。

会発から27年になると、確かに高齢化が顕著になってきたが、今日までのサーラを通しての会員たちの縦横無尽の繋がりは一層広がりをみせ、若い世代への歴史学習に繋がっている。

24年前の春、会員さんから綿の種を頂いてから毎年綿を栽培するようになり、4年前から、子供たちに綿のことを知ってもらいたいと加古川町粟津の休耕田で260本の綿を作り、11月3日に「綿まつり」を開くようになった。綿畑の中にテントを張り、たくさんの方々に摘んで頂いた綿の種取り、糸紡ぎを体験してもらっている。播磨は温暖で古くから綿が盛んに栽培されていた土地で、すっかり明治のはじめに廃れたが、加古川市西神吉町・志方町のタオル・靴下産業に残っている。年々立派に収穫できる綿を見てこの土地がいかに綿作りに適しているかを実感する。

会員には、越知谷小学校に招かれて、地域に伝わる民話を児童に語って聞かせている足立誠太郎氏（87歳・神河町作畑）がおられ、その活動の様子をサーラで紹介していた。綿作りにもそんな機会があれば、と願っていたら、加古川市立西神吉小学校（水野修校長）の地域探検クラブ（4・5・6年生9名）担当の原陽一郎教諭がサーラを読まれて、児童たちが楽しめる地域学習を、と依頼して下さった。江戸時代に全国屈指の綿花の産地だったという郷土の歴史学習を月1回で6回開く機会に恵まれた。綿作りの産地であったという歴史学習だけでなく、紡錘車や糸車で紡ぎ出した糸で手織りして布を作り出す行程を体験することで、すべて手仕事から工業が始まったということも伝えている。

協議会では小学生以外の若い世代に地域史を調べ学ぶことに興味を持たせることが出来るか、という問題提起があり、大学の役割が語られた。議論を尽くす時間が足りなくて発言しなかったので素晴らしい実例をここに記したい。

会員で毎号サーラに『忘れられつつある生活文化』を寄稿している井上知美さん28歳は、大学のゼミの教授に感銘を受け、街で就職せず、郷里の田舎で職に就いている。祖父母や村の古老、前出の足立誠太郎氏から聞き取り調査を重ね、先人の知恵に満ちた暮らしを学び、ブログ「山と川のあいだで」でも発信している。彼女が育った越知谷地域は村が子供を育ててきている。その環境下で彼女がもらった種が大学教育で発芽したと言える。

若者を育てることは、現代ほど深刻でなかったにせよ昔も変わらず取り組まれていた。地域、学校教育に文化サークル、文化誌が加われば未来は明るいと考える。希望を持って会員・読者と一緒にこの問題を考えたいと思う。

報告⑥

史談会と学校教育

-網干地方史談会の取組-

増田　政利氏
（網干地方史談会）

私達、網干地方史談会において、平成14年に出前教室として、地元学校の兵庫県立網干高等学校、姫路市立網干中学校と網干小学校そして網干西小学校への授業参加として講師を派遣を行なっていますが、現状では史談会において大変な重荷

となっています。それは会員が高齢となり足や腰が弱り学校の教室への訪問が 3 階や 4 階へ上がるのが困難となっています。

しかし、「地域史を調べること学ぶこと」の勉強会に参加の機会を与えて頂き、自分自身において大いに勉強になりました。いかに子供達に地域の歴史を教えて伝えていく事が大切かを知りました。

また如何に平成 14 年当時の校長先生 4 人が網干のことを思い奉職されていたか、そして此の地域の勉強が自分が在職中だけでなく 1 年でも長く続ける事を願い兵庫県教育委員会や姫路市教育委員会に話して地域の歴史の時間をいただき、高校においては県教委より私達に「特別非常勤講師」の委嘱状を出していただき、気持ちよく生徒と授業が出来るようにと、史談会も教本を作り児童、生徒と向かい合っています。

でも喜んでばかりはいられません。なぜなら、私達史談会会員が高年齢となり若い人達の入会がないので、史談会の行く末は、学校への授業参加はと考えると頭が痛くなる。このような時「地域を調べること学ぶこと」に参加して、他の市町において学校の授業の中に歴史を取り入れることが如何に大変かを思い知りました。理解ある校長先生がいる間、興味ある先生だけでなく地域を巻き込んだことが大切かを知りました。

今、思うと 10 年前に子供達だけでなく先生方にも網干のことを知っていただこうと取り組んで作った「網干歴史教育の会」、当時の 4 人の校長先生、PTA 役員、史談会の努力によって単発でなく今まで 10 年続いているのは、私達史談会の力だけでなく歴代の校長先生、PTA 役員、学校あげての協力の賜物と思います。

そして、最初この会を立ち上げた 4 人の校長先生は今も史談会、教育の会の役員や講師として力を貸していただいています。今あらためて出前教室の大切さを知り、今後若い人達に地域の歴史を教えるのではなく共に勉強する会として新しく出直そうと思います。この事により若い人達も地域の歴史に興味を持っていただけると思います。

また学校への出前教室講師も何も史談会だけでなく地域の人を抱きこんで、いろいろな専門の人に行っていただく事も考えて、“共に学ぶ、共に教える”の精神で「網干地方史談会」を続けていきたいと思います。そして、この会に呼んでいただいた事に深く感謝いたします。ありがとうございます。

報告⑦

ひょうご歴史文化フォーラムをめぐって

小栗栖　賢治氏
（兵庫県立歴史博物館）

１．兵庫県立歴史博物館と地域史研究

「ひょうご歴史文化フォーラム」（以下、フォーラム）は兵庫県立歴史博物館に事務局を置いて活動している。歴史愛好家を対象とするこの団体について、設立・活動、そして、今後についての報告を行う。

兵庫県立歴史博物館は、1983 年 4 月世界文化遺産に登録されている国宝姫路城に近接する場所に開館した。第 1 回目の常設展示の全面リニューアルを 1996 年に実施し、第 2 回目を 2009 年に行った。第 2 回目のリニューアルは、博物館利用者の裾野の拡大を目指していた。兵庫県立歴史博物館には「郷土の歴史に関する県民の理解を深め、教育・学術及び文化の発展に寄与すること」、「県民が積極的に参加し、生涯にわたって文化活動や学術研究ができる学習の場であること」という基本姿勢があるが、リニューアルに際しては、「世代を超えて」、「地域の豊かさ」、「ふるさとの再発見」などを新たな視点に据えていた。「ひょうご歴史文化フォーラム」の設立はこの時期に検討された。

フォーラムの設立にあたっては、地域博物館が扱う歴史とは何かということが検討された。学校で教えている歴史は日本国の歴史、国民を教育するための歴史であると位置づける。地域博物館が教科書と同じ視点で歴史を組み立てれば、中央と同じ歴史を持たない地方の歴史は魅力を失い、個性を喪失させてしまう。さらに、教科書に書かれている歴史だけが日本の歴史ではなく、それぞれの地域にはそれぞれの歴史がある。例えば、その地域の由緒、地域に祀られている神々や英雄の話。こうした伝承はどこの町や村でも語り継がれ、時にお国自慢になり、ふるさと意識を昂揚させる礎ともなる。これらが地域の人々にとって最も身近な歴史であるということ。

２．ひょうご歴史文化フォーラムの設立

こうした考え方を背景に、当初、このフォーラムが兵庫県下の郷土史や地域史研究の団体とその会員の交流の場・サロンとして活用されることを期待する。しかし、会費の捻出、自分たちの会を運営していくだけで精一杯であるという反応が大半を占め、難しさを実感した。2006 年 11 月に設立集会を行うが、この時、歴史愛好家を主対象に会員募集を行うこととした。事業は 2007 年 4 月から始めましたので、この 3 月で 5 年を終える。

「ひょうご歴史文化フォーラム」の組織的なことであるが、事務局は先述したとおり兵庫県立歴史博物館に置いた。運営委員会には兵庫県の各地域を代表する歴史研究団体である播磨学研究所・神戸史学会・丹波史懇話会・但馬史研究会・淡路地方史研究会に参加を求めた。運営経費は会費（個人会員千円、団体会員 3 千円）と博物館の運営経費から一部補填した。会員の傾向は、全体の 8 割程度を播磨地域在住の方、残る 2 割の大半を神戸・阪神地域在住の方が占めた。会員は 2007 年が 320 人程度、現在は 160 人程度になっている。

３．ひょうご歴史文化フォーラムの活動内容

活動内容は「身近な歴史を楽しむ」ことを優先させる事業を展開してきている。事業として、①講演会（春と秋）、②現地見学会（2 回）、③ひょうご史最前線（講座 2 回、現地見学 1 回）、④ひょうご史談話会（報告会年 1 回の予定）、⑤会報誌の発行（年 3 回）を行ってきている。特色ある事業として、「ひょうご史最前線」をあげることができる。この講座は地元の教育委員会等で文化財の調査研究に携わっておられる方に、地域史研究・文化財調査の最新の情報・成果について講演をお願いした。次年度、その内容をもとに現地見学会を行うというように、講座と現地見学を連携させているのも歴史を身近に感じてもらいたいという工夫である。

４．年間の活動の中で思ったこと、考えたこと

フォーラムの歩んだこの 5 年、そして、私自身の 30 年に及ぶ学芸員生活から強く思うことは、地元でふるさとの歴史や文化財を研究されている人が大変少なくなったことである。地域での歴史資源の発掘、文化財としての保護には、行政や外部の研究団体等からの働きかけが重要な役割を果たしている。しかし、それだけでは限界があり、やはり地元でふるさとの歴史を次の世代へ語り継いでくれる語り部が必要であると感じたことである。フォーラムに参加された方が地元に戻り、ふるさとの語り部として活躍していただけることを期待している。

むすびに

「ひょうご歴史文化フォーラム」は、設立当初から博物館の内側においても大きな課題を抱えていた。それは、博物館の設立とほぼ同時期に設立されている友の会と事業内容が競合することであった。それと、フォーラムの活動を何年継続させるのかということであった。会員制を維持しての継続は、事務量の多さからいわば専従のスタッフを配置しないと運営できないからである。

会員制による活動はこの 3 月で終え、4 月以降は博物館の事業として年に 1 回講演会・シンポ・報告会等を交えたフォーラムを開催し、地域史研究・ふるさと学習を応援していきたいと考えている。

報告⑧

地域の歴史文化を生かした教育活動の展開 -淡路市立育波小学校の実践-

海部　伸雄氏
（淡路市立青少年センター）

１ 育波小学校の教育

播磨灘に面した児童数 80 名（H 22）の小規模校である。ふるさと「育波」に愛着を持ち誇りにできる児童を育成するために、体験活動（社会体験・自然体験）を重視した教育を行ってきた。その中から「地域の歴史文化を生かした教育活動の展開」というテーマに沿って、歴史学習の中での体験活動について報告した。

２ 地域の歴史文化を生かした教育活動

校区の歴史文化環境

校区の主な遺跡には、縄文時代の堂の前遺跡、弥生時代の五斗長垣内遺跡、古墳時代の浜田遺跡がある。江戸時代には棉の栽培も行われ、漁師の仕事着「どんざ」も残る。

具体的な教育活動

縄文時代の実践「縄文人は何を食べたか」は「予稿集」で報告。弥生時代は、米作り体験（田植え・石包丁での収穫・古代米試食）と五斗長垣

内遺跡の特色である鉄器作りの実践を報告した。「米と鉄」の体験で弥生時代の特色が理解できた。古墳時代は浜田遺跡から出土した飯蛸壺をモデルに自分たちで蛸壺を作っての蛸壺漁（蛸壺成形・焼成・蛸壺漁・調理・試食）を報告した。道具作りや漁の難しさを体験した。

江戸時代は「棉を育て布を織る（栽培・収穫・綿繰り・糸紡ぎ・布を織る）」実践。

情報を発信する

子ども達が遺跡見学や現地での古代米作り体験、鉄器作り体験などで学んだ成果を他学年や地域に伝えるために取り組んだ「五斗長垣内遺跡ジオラマ作り」について報告した。

一連の歴史体験学習で学んだふるさと育波の良さを広く発信するために「わたしたちの町　育波」（ふるさとマップ）を作り、千部印刷し校区の全戸に配布した。この子ども達の努力が、その後の育波公民館のふるさと歴史講座開催につながることになった。

３ 体験学習を担う職員研修

教師の総合的学習

地域の歴史文化を生かした教育活動を推し進めるのは教職員である。その教職員の力量を高めるために実施した「教師の総合的学習」について報告した。ねらいは「地域の教育素材をどう教材化するか」であり、地域の歴史文化の教材化も主要テーマである。

４ 成果と課題

成果

・育波の豊かなイメージを育み、学ぶ楽しさが実感でき学力が向上した。
・保護者や地域住民に、地域の歴史文化に対する関心が高まった。

課題

・学校体験だけで、また、単年度だけで終わらないように、指導計画に位置付ける。
・行政等地域の歴史文化遺産を教材化するための支援体制を作る（地域歴史遺産目録等を作り自由に閲覧できるようにする。歴史民俗資料館等に相談窓口を設ける等）。

報告⑨

地域と学校と行政が連携した歴史文化遺産への学びと活用　-たつの市「堀家住宅」での取り組み-

岸本　道昭氏
（たつの市教育委員会）

１　人口減少社会と文化財行政

まちづくりの原点は、個性ある地域の歴史と文化の中にこそ存在する。地域の歴史や文化を語る文化財、つまり歴史文化遺産は、適切な保存と活用がなされることで、輝く地域の宝になっていく。しかし、そうした歴史文化遺産は、激動する現代社会の中で、ともすれば忘れられ、失われがちであることも事実である。これから顕著になっていく少子高齢社会の到来と人口減少社会に向かって、では、具体的にどのような取り組みが考えられるであろうか？。

ここでは小学校 6 年生と地域（自治会）が文化財行政と文化財所有者と連携した取り組みを紹介したい。

２　学びと地域貢献の場としての文化財

学校には時にこうした活動に熱心な先生がおられ、総合的な学習の時間を限界まで活用して多様な実践を重ねている。子どもの時の記憶と経験こそが文化財を未来へ引き継ぐという理想に、こうした実践例が切り結ばれる。

たつの市立小宅小学校 6 年生は、地域の歴史や文化を学習の場と認め、発表の場に選び、実践の場と位置づけた。歴史文化遺産に学び、同時にその情報を発信するという学習機会は、地域に出て、聞くことから始まった。

それを具体的に実現させ、発表の場として機能したのが県指定重要文化財の「堀家住宅」である。約 4000 ㎡の敷地に主屋、座敷、蔵、門や塀など 34 棟が江戸時代のまま一括して残されている。その歴史的文化的価値は地域のみならず、我が国全体でみても極めて貴重な文化財であることは疑う余地がなく、実践の場としては申し分のない舞台装置であった。

こうした地域の文化財を、子どもたちがどう活かすか。学びの場であると同時に、文化財行政や地域への貢献にもなり得る活動とは、6 年生が

一人も欠けることなく全員で来場者を案内解説するという企画である。『地域の歴史「語り人」プロジェクト』と名づけられた子どもたちの取り組みは、その本番に向けて半年間の準備と助走を経てすばらしい結実をみた。

私たちの地域とはどのような成り立ちがあるのか、忘れられた地域の歴史を小学生が探りだす。その過程で地域をめぐり、お年寄りに尋ね、行政にも協力を求める。幅広い連携がおりなす世代交流と地域交流が始まりつつあった。それは言わば、歴史文化遺産を活かした人づくりでもあり、地域づくりのきっかけとなる活動でもあった。

3　地域の歴史「語り人」プロジェクト

所有者と自治会とたつの市が三者で企画した「堀家住宅」の特別公開にあわせ、子どもたちは地域の歴史を調べあげたパネルを手作りし、ところ狭しと配置した。そして来場者に対して、6 年生全員が交替で堀家の案内解説のガイドを務めるのである。歴史に詳しい話の上手な選抜メンバーではなく、6 年生全員がおこなったということが実にすばらしい。ガイドぶりは、大人顔負けの丁寧さ、親切さで、気配り目配りが行き届いたものであった。来場者が感心する声は絶えることなく聞こえてきた。

この実践活動は、2010 年度に始まり、現在は 3 年目を迎えている。学年が変わり、子どもたちの顔ぶれが変わっても、高い評価をいただいていることに変わりはない。初年度は 2 日間で 2200 名もの来場者があり、文化財の持つ魅力もさることながら、子どもたちの活躍が功奏したものと確信する。

おそらくこういうことが苦手な子どももいたはずである。学校を出て地域の人たちに学ぶという慣れぬ苦労がある。それを見知らぬ人たちに伝えようとした実践はさらに難しかったはずである。しかし、この苦労や困難を軽々と飛び越えていった子どもたちに驚く。きっと彼らにとって、かけがえのない経験となり、大きな自信になったのではないか。自分の才能や未来の可能性を見出すきっかけになったにちがいない。この経験は、子どもたちを飛躍的に成長させたと信じるものである。

4　文化財を活かすまちづくり

上記の事業をふまえ、期待される成果と課題を記してまとめとしたい。

大成功を納めたような書き方をしてきたが、実態としては熱心な学校教員の肩に多くの苦労が託されており、人が替わることで風向きが変わる恐れがある。地域社会である自治会でも同様で、第三者的強固な受け皿団体を築く必要も痛感する。さらに、地方自治体にとっても、文化財を活かすまちづくりをいかに行政として実現させるか、継続させるか、という重い宿題がある。

戦後、文化財保護法が整って飛躍的に指定文化財が増加し、条例による地方自治体指定文化財も増えている。21 世紀初頭からは保存だけではなく、いかに活用するかという原点が強く意識されるようになった。これは未来へ継承すべき歴史文化遺産の行政施策に対する展望が、意識的にせよ、無意識的にせよ危機感を伴うようになったからとみる。冒頭に述べた人口減少社会は、確実に文化財を蝕み、新たなる脅威として徐々に浸透する。

文化財の保存は、あらゆる機会を捉え、多くの団体を結集して歴史のストックを生かした地域社会形成の核として位置づけておく必要がある。これまでのような行政主導ではもたないことは明らかである。所有者や地域社会だけでももたないだろう。特に、これからの未来を担い文化を育む子どもたちには、大いに活躍してもらわねばならない。必要なのは世代を超えた継承であり、子どもたちこそ未来を託された主人公であるという点だけは疑う余地がない。歴史文化遺産をバネに成長した子ども時代の記憶が、大人になってから意識的に活かされるなら、大きな希望である。

そのために、歴史文化遺産をめぐって今を生きる私たちはもっと多くのことに悩み、考え、提案し、実践しなければならないのである。

報告⑩

香美町の歴史文化を引き継ぐために
-ふるさとマップ作り-

石松　崇氏
（香美町教育委員会生涯学習課）

1．はじめに

香美町は兵庫県の北部に位置し、日本海に面する

地域で、内陸部は 1,000 メートル級の中国山脈に囲まれ、林野が 86.0 %を占めている。町の中心を南北に縦断する矢田川水系に沿い耕地や居住地を形成し、総面積 369.08㎢と広大なエリアで但馬地域の 17.3 %を占めている。また、山陰海岸国立公園に指定され、波蝕海岸風景を代表する名勝香住海岸がある一方、山間部は氷ノ山後山那岐山国定公園、但馬山岳県立自然公園など自然公園指定区域が約 6 割を占める山と川と海の豊かな多自然環境を有している。

気候は、日本海型気候に属し、年間を通して多雨多湿で、冬季は山間部を中心に積雪が多く、「豪雪地帯」にも指定されている。

香美町を構成する旧香住町・旧村岡町・旧美方町の区域は昭和 30 年代に合併を行い、昭和の合併以降は、住民生活に密着した衛生処理や常備消防などの分野で広域行政の拡大を進め、平成 17 年 4 月に 3 町が合併し現在の香美町となった。

２．合併前　香住町での取り組み

現在につながる「校区版ふるさとガイド」作成の発端となったのが旧香住町時代に作成した「香住町の歴史文化遺産　－香住町遺跡分布地図－」（2005.3　香美町教育委員会）の取り組みである。方向性として従来の遺跡分布地図を踏襲しつつ、兵庫県教育委員会が 2003 年に策定した「歴史文化遺産活用構想」の中で提唱している「STEP1　価値の発見（1）地域特性の整理」を取り込んだものにしようというものであった。具体的には町内に存在する国県町指定文化財のほかに、地域の人々が「未来に残したい」というものを紙面に掲載した。「未来に残したい」の抽出については旧香住町域 47 集落の代表者に「地域の中で未来に残していきたいものはなんですか」というアンケート調査を行った。

アンケート調査の結果、集落によって差はあるものの国県町指定文化財を除いて 300 件以上もの提出があった。これらの歴史文化遺産の全ての物件についての位置、説明、写真を「遺跡分布地図」に掲載することは本来の遺跡分布地図の目的から無理であり、位置と名前を示すことしかできなかった。しかし、この膨大なデータをなんとか本という形で刊行して、地域の人が他の地域と比較することにより自らの地域の特徴を知って、地域を見直すきっかけとして欲しいとの願いから同時に「一次代に継ぎたい宝の物語一　わがむらの歴史・文化遺産」（2005.3　香美町教育委員会）を刊行した。こちらは位置と名前に加えて遺跡分布地図には掲載できなかった物件ごとの説明、写真を掲載している。

この報告書を刊行した際の思いは、編集後記に「こうした調査を早い時期に取り組み、民俗行事等の簡略化や消滅を防がねば・・・と考えながら、本書作成もこの時期となってしまった。調査も 1 年間という短期間で行ったもので、区長様にアンケートの形で調査をお願いしその報告をいただきまとめたものである。本書はそうした意味から十分とはいえるものではなく、区内で取上げられていないものもたくさんある。しかし、まず拾いあげておきたい、少しでも記録にとどめておきたい、それさえ出来れば後は本書にのっとり、追加したり、修正や内容を深めていくことが出来る、と考えられることからあえて刊行することとした。」とあるとおり、内容は不十分ながらも地域での活用、そして更に内容を充実していただけるようにとの思いがあったが、予算の都合上かなり限定された範囲でしか配付できず、また配布したが紛失している例などがあり、継続して活用されているとは言い難い状況がある。

３．合併後　香美町ふるさと教育

2005 年 4 月に城崎郡香住町、美方郡村岡町、美方町が合併して香美町が誕生した。新たに誕生した香美町では「ふるさと教育の推進」を主要な政策課題として取り組むこととなった。香美町における「ふるさと教育」はいままでの学校教育事業、社会教育事業を「ふるさと教育」として再定義するとともに、地域の歴史や文化に詳しい人を「ふるさとものしり博士」として名簿を作成し、また、従来から学校の総合的な学習の時間などにご協力いただいていた地域の方を小学校区単位に「ふるさと教育応援団」として組織化した

香美町教育委員会では「ふるさと教育」における歴史文化遺産の活用については県が策定した「歴史文化遺産活用構想」の「歴史文化遺産活用の 4 つの柱」のうちの 1 つ、「学舎（まなびや）づくり」として位置づけており、いかに地域に残る祖先たちの歩みを子どもたちに感じ取らせるか、そしてそのためには戸外へでてオリジナルに触れるきっかけ、動機付けとなるものを整備していかねばならないとの認識をもっていた。

まず、合併して最初に取り組んだのは「香美町ふるさとたんけんマップ」（2007.7 香美町教育委員会）である。これは合併して町域が倍増したことにより、自分の知らない地域、集落の位置を視覚的に把握してもらうことを狙いにした。作成にあたっては「ふるさとものしり博士」から数名を編集委員としてお願いして

意見をいただいた。サイズは A2 両面カラーで、たたむと A5 縦半分の大きさとした。これは持ち歩くことを考えた際の最大の大きさでこれ以上大きければ持ち歩きづらいとの判断からである。表面には全町の地図に集落の名前、読み方、川の名前、山の名前、国県指定文化財の場所を掲載した。また、昭和 30 年代以前の旧村単位である現在の小学校区単位に、あまりポピュラーではない歴史文化遺産の名前と自分で調べたことを自由に書き込める欄をつくり、このマップに書き込むことにより自らのものとしてオリジナリティが図れるように考慮した。裏面には「海のものがたり」「川のものがたり」「川のふしぎ」「山のふしぎ」と自らを取り巻く自然環境についての意識付け、そして「ふるさとものしり博士」の名簿を掲載した。当初は「ふるさとものしり博士」の顔写真も掲載する予定であった。これは顔写真を掲載することにより、それを見た子どもたちが「あれ？うちのじいちゃんがのってる」や「近所のじいちゃんがのってる」など、地域の高齢者の知識を見直す機会ができればとして狙ったものであったが一部の方から同意がとれずに掲載は断念し名前と簡単な説明のみとした。

「ふるさとたんけんマップ」は夏休みの課題の素材として活用できるよう 7 月上旬までに小学校に配付した。また、子どもたちが「ふるさとたんけんマップ」を活用、もしくは「ふるさとたんけんマップ」を活用しなくても地域のことを対象とした夏休みの課題にとりくむ動機づけとして「こどもふるさとものしり博士」キーホルダーを作成し、また子どもたちが「ふるさとものしり博士」に話を聞きに行った時には「ものしり博士」がその「ふるさとたんけんマップ」や夏休みの課題にスタンプを押せるように「ものしり博士」全員に「ものしり博士スタンプ」を配布し、歴史文化遺産を夏休みの課題として活用してもらえるような仕組みをつくった。

地域の老人会の中に「ものしり博士」がおられるところでは子ども会と老人会の交流事業等を夏休み開催している場合があり、その際に「ふるさとたんけんマップ」が活用されたケースがあった。しかしながら、子どもたちが自主的に「ふるさとたんけんマップ」を夏休みの課題として活用したという例はほとんど聞くことがなく、学校教材として活用されたのみであった。これは小学校の子どもたちでは全町は行動範囲が広すぎて、課題の対象として扱うことが難しいからではないかという意見があった。そこで 2008 年からは小学校区を対象とした「校区版ふるさとガイド」を作成した。

内容は小学校区を見渡した鳥瞰図見開き 1 ページ、集落ごとの歴史文化遺産の位置を示した鳥瞰図見開き 3 ページ、地域の伝説や伝承、歴史、年中行事を各見開き 1 ページとして計 16 ページの B5 判カラーの冊子とした。この冊子の作成にあたっては当初から学校教育での活用を図るため、計画段階から小学校長及びふるさと教育担当教諭に参加をお願いし、小学校区毎に組織された「ふるさと教育応援団」から編集委員を選んでいただいた。

鳥瞰図を採用した理由は一般的な等高線の入った地図だと、ある程度地図を読んだ経験がないと谷の深さや山や峠の高さ、また集落ごとの距離や高低差が視覚的に把握できないため、小学校 3 年生程度でも眺めて楽しい絵地図として鳥瞰図を使った。

掲載する歴史文化遺産は集落の代表者にアンケート調査を実施したものを掲載した。1 年目では地域の伝説や伝承、歴史、年中行事を掲載したページはテーマ別ページとして固定化せず、校区ごとの編集委員会で「この地域で伝えたいこと」をテーマ化するという方針で取り組んだ。その結果、現在までテーマ別で掲載した内容は前述の伝説や伝承、歴史、年中行事の他、郷土歌、地域のシンボルである山や川などの自然環境、産業など地域の特色を表したものとなっている。

４．おわりに　今後の課題

香美町が「ふるさと教育」の一環として取り組んだ「ふるさとものしり博士」「ふるさと教育応援団」の課題としては年齢層が高いことがあげられる。町内の公民館が毎年 6 回開催している「ふるさと語り部講座」では、参加者のほとんどが 60 代以上の高齢者という実態があり、30 代から 40 代の参加者はほとんどない。「校区版ふるさとガイド」が家庭での話題となることができれば、子ども、親、祖父母という知識の継承ができると考えているが、その動機付けとなることを考えていかねばならない。

また、過疎化などで人口の 50%以上が 65 歳以上の高齢者になって冠婚葬祭など社会的共同生活の維持が困難になっている、いわゆる「限界集落」の問題も香美町内には存在する。この問題を歴史文化遺産の側面からみてみると顕著に現れるのが年中行事の継続についてである。子どもから高齢者まで全ての世代が偏在していない集落ではマツリなどの集落行事も維持することができるが、高齢者のみの集落となるとマツリでは集落の代表者数人が宮司とともに集落の神社に参拝するのみとなり簡素化していく傾向にある。

しかしながら山下祐介氏が『限界集落の真実』（2012　ちくま書房）の中で述べているように、いわゆる限界集落については「集落の限界問題はこうして、世代間の地域による住み分けがなされた上で、高齢による担い手の喪失が予想される地域の中で、2010年代以降、いかにして次世代への地域継承が実現されるかという問題として設定される」ということであり、歴史文化遺産という観点に矮小化して見ると、地域の歴史文化遺産を次の世代に継承していく枠組み作りができるかどうかが問題となる。手がけてきている「校区版ふるさとガイド」などもその一つと言うことができるかもしれないが、地域の生まれ育った方々の生活の「息吹」までを表現はできていない。

香美町内には全部で 10 の小学校区がある。現在までに 5 校区の「校区版ふるさとガイド」を刊行し、現在 1 校区を編集中である。現在まで手がけた「校区版ふるさガイド」の編集委員会では地域の方々「わが村」に対する思い多く聞いてきた。今では「校区版ふるさとガイド」作成はこの編集委員会でわが村の歴史を語ること、そしてそれを編集委員の共有の知識としていくことに本当の意味があると感じている。また、うまく表現できないが地域によっていろんな「色」があることも感じてきたことである。

画一的なく地域の実情に合った形で、さらに地域の方々の「息吹」をも盛り込むことのできる枠組みを考えることができれば、地域の歴史文化遺産を次の世代に継承していく方法の端緒となるのではないかと考えている。

今年、公民館の事業として餅つきをすることになり、近くの家に杵と臼を借りに行った。昔は年末になるとどこの家でも餅つきをしたものだというような話を聞いていると、最近、家を出た息子夫婦が孫を連れて帰ってきて餅つきをしたところ、孫が非常に喜んだので毎年もちつきをすることにした、という話を 2 箇所で聞いた。このような出来事を萌芽としてとらえることができればと思う。

総合討論

司会（村井良介）（神戸大学大学院人文学研究科）：

総合討論を始めます。10 本の報告をいただきましたけれども、今回の趣旨としまして、勿論かつてからさまざまな郷土史・地域史の団体が活動してこられたわけです。そのことは大国（正美）さんからお話しいただきました。しかし近年はさまざまな、高齢化とか会員減少といったことが課題になっている部分がある。その一方で、後半でご報告いただきましたような、さまざまな新しい団体による取り組みも始まっている。お互いに共通することもあるということで、お互いの活動に学びあいながら今後について考えていければと思います。

今日の皆さんのお話の中で全てのお話しに共通していた 1 つは、「次世代、若い世代に伝えたい」ということだと思います。もう 1 つは「生活の中で」や「身近な」、「体験を重視した」といったこと。範囲に直しますと大字であるとか旧村、小学校区といった身近な範囲を対象として行うといった点が共通したお話として出てきたかと思います。そういった点を少し議論していきたいと思います。

それからもう 1 つ重要だったのは、近年のいずれの活動に対しても行政や大学などがバックアップ、支援をする。そういった役割が、近年の活動の中では重要だということが見受けられたかと思います。会場を提供するとか資料を提供するとかだけではなくて、そもそも最初から後押しをするとか、そういったことも非常に重要だったかと思います。そういった形で、行政や大学の役割を最後に議論できればと思います。あまり時間がありませんので、討論が尽くせないところもあるかと思います。

最初に、個別の質問の時間を取れませんでしたので、報告に対していただいた質問から始めます。東北大学の佐藤（大介）さんから、「個人所蔵の、あるいは個人所有の歴史資料について、公開するための同意をどのように得ることができたのでしょうか?。所有者・所蔵者の役割・位置付けについて教えてください」という質問用紙が出ています。これはどなたに対してですか?。

佐藤大介（東北大学災害科学国際研究所）：皆さんに対してです。

今日は本当に、皆さんの熱の籠ったお話し、大変参考になりました。被災地で、東北で同じようなことをこれからやっていく必要があると思っていまして。兵庫の取り組みは被災地もそうですし、全国的にもモデルであることをアピールしていくのも神戸大学の役割になるのかなと思っています。

大国さんが書かれた、「草の根アーキビスト」と言うか、所蔵者本人が自分の資料を使ってもらうという、そこの所蔵者の位置付けというのがすごく大事な

のかなと。先程のたつの市の堀家はまだお住まいなのですよね？そこであれだけの人を入れてやるというのはかなりの勇気が要るというか、相当意識がないとできないのかなと。結構宮城とかでは、所蔵者自身が地域からはぽつんといるとか、これはケース・バイ・ケースだと思うのですけれども、なかなかそこまでは。「自分のものは皆のものである」というところに所蔵者自身が決断するのは、もしかしたらすごく大変なことなのかなと思って。そこをどうクリアしていくのかと言うか、クリアしていくには地元で活躍している皆さんのようなお立場の方が非常に重要なのだと思います。そのあたりについてもし、「こんな経験をした」とかがありましたら教えていただきたいのです。

司会：岸本（道昭）さん、お願いします。

岸本道昭（たつの市教育委員会文化財課）：一昔前は文化財の指定は、どちらかと言うと行政からの上から目線という面が多々あったと思うのです。「指定してやるんだ」というような。ところが時代は変わりまして、そうではなくて本当に地域の宝として、未来に継承していかなければならない文化財に関しては、やはり所有者の意識付けというところから出発して、行政はそれを最大限支援させていただくという形で、一緒にやっていきましょうということだろうと、私は思っております。

堀家住宅の件ですが、これは指定するにあたっても、これは所有者からの働きかけというものをまず前提にしましたので、「ぜひ、一緒にやりましょう」という形でお願いしましたので、そのへんは。勿論、お住まいになっている居室の中までは人は入れていませんけれども、見せられる範囲で最大限のご協力をお願いしたいと。子どもたちもこれだけ頑張ってくれていますよということでお願いした次第です。

司会：今、「草の根アーキビスト」の話が出ましたけれども、大国さん、いかがでしょうか？

大国正美（神戸史学会）：一に、間に入る私たちと所蔵者の方との人間的な信頼関係。これが全てかなと。阪神・淡路大震災の時に救出した史料を使った、読む会をボランティアでやっております。所蔵者の方は長い間史料を持っていましたけれども、それを行政にも貸さない、研究者にも貸さない。

ただ、家の中で見る、調査することについては全面協力する。こういうスタンスの方で。そういう方と 1 つひとつの史料群について向き合いながら接していく。これが 17 年ぐらい続いているわけですけれども、そういうことをするとその方も一緒になって古文書を読む会に参加し、その会を自分で主宰と言いますか、世話人として運用していただいています。そこの、人間のふれあうところがなければこれは絶対に広がらないのではないかと思います。

佐藤：ありがとうございます。今回東北で活動していて、被災したものが残っていくところで何が差を分けるかというと、所蔵者が愛着を持っている。それと、まさに皆さんのような地元で支える人がいるということが、例えば津波で完全になくなったものはもうしょうがないところがあるのですけれども、ちょっと濡れてしまったものを捨てるのかどうするのかということは、決定的にそこが分かれるということは、多分データとしても出るのでお伺いしました。ありがとうございました。

司会：他にいかがでしょうか？

竹村勝昌（神戸史学会）：地域の方々と一緒にいろいろな研究をされたり発表をされたりする中で、1 つ気付いたのですけれども。ほとんどが小学生と一緒にされている。もう少し上の、例えば中学生あたりというのは、実際に活動する面で非常に難しいのかどうか。行動力は彼らのほうがあると思うのです。そのへん、実際にやられていてどう捉えられているのかちょっとお聞きしたいです。

岸本：勿論、中学生あるいは高校生の方とも、他の面では一緒になってやろうということをやったりします。中学生は例の、「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』」という週間では文化財の保存・活用に関して関わっていただいていますし、高校生になりますと、県立高校ですが建築学科とかと連携して古代の竪穴住居を復元したり、あるいは史跡公園の中にベンチを作るといったことも高校生にはやっていただいたりという形で。たまたま今日は小学生の活動を紹介させていただきました。

司会：海部（伸雄）さん、いかがでしょうか？

海部伸雄（淡路市立青少年センター）：中学生と一緒にというのはなかなか難しいような気がします。やはり小学校でやりやすいのは、時間的にそれに当てる時間数が割とあるのです。社会科と総合的な学習で、私がやっていた頃は 3 時間だったのですが今はもう 2 時間になってしまいましたが。ですから、今日私がお話し申し上げたことも、総合的な学習の時間をかなり使っています。中学校に行きますと、中学校も総合の時間はあるのですが、それにまとまって取り組むことがなかなかできにくくなる。時間的な制約があるのと、それと何かをしようとした時に、自分の校区にどんな素材があるのかということを、ちょっと。先程、高齢化の話がありましたけれども、社会科の教師自体もそういうのに心を向ける余裕がなくなってきている。

昔の社会化は「足で稼ぐ社会科」とか「地域に出かけて」ということがかなりあったのですけれども、最近はそういう言葉はもう死語になりつつありますね。ですから例えば、「地域の歴史から日本史を見る」みたいな視点を持って、教材として作っていかなければならないのですね。例えば「黒船来航」でしたら、教科書はペリーですけれども、例えば大阪湾でしたらロシアのディアナ号が入ってきていますので、それに関する古文書や事実は沢山ありますから、そのあたりを「皆がいる、あそこに大きな船が来たんやで」といったところから入っていって、黒船来航まで結び付けていって、という指導計画を作っていく。それを教材化していくということなのですけれども。ディアナ号が大阪湾に来たということを知らない教員がほとんどですので、そのあたりはやはり、研究者と言うか地元の歴史をやっている方がどんどん、そういう研究成果をアピールしていくことが大切なのかなと思います。そのへんで学校と研究者、あるいはアマチュアの歴史家との結び付きがもっとあったらいいなと思います。そうすると中学校もいくと思います。

坂江渉（神戸大学大学院人文学研究科）：私が紹介した小野市立好古館の事例で述べます。この館は実は、今はあの活動を行っていなくて、2・3 年前に終えられています。しかしその間ずっと関わっていました。中学生との連携は可能でした。それはどう可能だったかと言うと、教材とかプロセスは全く分からないのですが、学校長がいかにやる気を出されるかというところがポイントです。そのために文化財担当者が頭を下げに行って「これは本気でやるんだ。だから頼む」ということを頼みこんだら、動いてくださった中学生もおられます。

それから普通、地区担というのがございますね。地域の担任の先生が。その方がやるのだというふうになったら、結構小学生と中学生が上手くジョイントしてやれる地区がございました。だけれども小野はずっと小学生が単位だったのは確かですけれども、可能性はあると思います。

増田政利（網干地方史談会）：網干の事例を少しお話ししたいと思います。網干は先程も申しましたように、小学校・中学校・それから県立高等学校と、小学校が 2 校区ありますので、4 校区の授業を網干地方史談会が持っております。そして、網干歴史教育の会という、その行事を遂行するために校長先生・教頭先生に中に入っていただいて、別個の団体という格好にしてそこで「こういうことを教えてほしい」ということを出してやっております。小学生は実際に地域、現場に行って、「こうやで」「ああやで」と教えます。そして中学 1 年生は網干にある行事を、6 クラスありますので網干地方史談会の役員が行って、それぞれ違う行事を教えています。2 年生は人物編で、網干から出ている人物を教えています。3 年生は進学がありますのでお休みしています。極端な例ですけれども人物の中で、河野東馬を教える時は実質、河野東馬さんの誠塾に来ていただいて、そこで教えたりしております。高等学校は 10 人の講師が、今年は 7 講座を教えています。網干の神社やお寺、それから網干の人物史、伝統行事、網干の由来、そして網干に江戸時代から昭和の戦前まで高瀬舟ですごく栄えた町だったのですけれども、本当に歯抜けでシャッター街になっておりますがその一番街を考える勉強会、網干は昔こんなすごいものが採れたのだよということで網干の郷土料理と網干の物産、そして網干には企業が沢山ありますので、ダイセルなどは 102 年目年を迎えておりますので、そういうような、網干の企業について勉強したいというような子どもたちに各講師を送り込んで。大体 1 年間に 10 時間の授業を 10 人の講師が受け持っています。今月の 6 日に最終の、勉強したことの発表会が網干高等学校であるのですけれども、史談会の役員は全員招待されていて、自分たちが教えたことをどのくらい理解してくれているのか、発表を楽しみにしている状態です。

司会：次に、皆さんの報告の中で幾つか、共通する論点が出ていましたので、そちらに進んでいきたいと思

います。1 つは「身近なもの」や「生活の中で」といったキーワードがたびたび出ておりました。それとも関わるかと思いますが、空間的な範囲としては「大字」であるとか小学校区というお話が出ていたと思います。石松（崇）さんのお話にもありましたけれども、全町の地図を作ってもなかなか使いにくい。やはり小学校区でないと話がしづらいということも関わっているのかなと思います。ただ、落合（重信）さんの「生活の中から」という話もありましたが、単に身近にあるという話ではなく、落合さんの話はやはり生き方と関わっているのかなと思います。対象として、「身近な生活に結び付いた」、空間で言いますと大字・小学校区といった単位を対象とすることについてご質問・ご意見がありましたら出していただければと思います。

奥村弘（神戸大学大学院人文学研究科）：襖の下張りのお話がありました。歴史文化に関するアプローチもいろいろありますが、やはりやっていて楽しいというのは重要ではないかと。最近そういうのが増えてきていますが、その楽しさ・面白さは今日も報告がありましたがそれをもう少し。個人の中ではどういう面白さがあるのかということを少し話していただきますといいかなと思っています。いかがでしょうか?

司会：久斗（政光）さん、いかがでしょうか?

久斗政光（旧玉置家住宅文書保存会）：襖の剥離ですが、楽しいとかそういう意味ではなくて。今やっているのは玉置家のケースがほとんどですが、ゆくゆくは広げていって、探してそれを剥離して解読していくような方向に持っていくと今日は言いましたが、玉置だと大福帳や日記という感じのものです。ただ、型紙が襖に貼られていることは全国的にも珍しいのです。そういうのも出てきて。型紙を剥がすことによって、あれは三木の歴史がかなりありますので、それを製品化というか、藍染にしていくのもまた楽しいところではないかと思います。またそれを 1 つの基点として、今は豊岡などでもいろいろ、型紙も出ていますので。今、うちの場合でも型紙を展示して、すごくやっておりますが、襖から出てきたということに対しては珍しいから、もっとこういうことに活かしてやっていったらと思います。

板垣貴志（神戸大学大学院人文学研究科）：三木の担当ですので、久斗さんのお話しに少し補足したいことがあります。特に解読班の、襖から出てきた断片を目録化していく時にアドバイスするのですが、大国さんのところで最後に出てきた、「『問い』を見つける地域史研究」ということで。ただ単に文字を読んで満足される方も結構多いです。特に民間で独自に勉強されてきた方は。ただ僕はわざと、常に「何だろうね?」「何だろうね?」と質問攻めにしながら解読作業を続けるようにしています。時代背景やなぜこれが残ったのかということも含めて考えながら、問いを発しながら史料を整理してゆくように気を付けています。その考えた結果を、剥離している人に解読班は説明をして…という、いいつながりができているのですね。解読グループも 5 名とパワーポイントには出ていましたけれども、今は 8・9 名ぐらいにメンバーが増えています。そういういい循環ができていることを補足します。

司会：司会からで恐縮です。継承しなければならない、未来に伝えたいというお話がずっと出ておりました。その際に、地域の共同性は多層にあると思うのですが、継承したい対象は大字の歴史であったり小学校区であったりするということはどういうことなのか。自然にそうなるのだろうと思うのですけれども、そこをちょっと考えてみると何でそうなるのかということです。大槻（守）さん、そこらあたりはいかがですか。

大槻守（香寺歴史研究会）：地域論になると難しくなるかと思うのですが、行政単位でやっているのが自治体史でありますが、よく言われますように自治体史は作っても読まれない。いかにして読まれる自治体史にするかという苦労をされているわけですが、一方では私共が大字というのは生活空間の最も基礎的な地域だと考えています。

よく「ムラ社会」と言われる日本の村は、元々は大字単位であっただろうと考えています。大字の外と中とでは、人々の考え方が違っていたと捉えていたように思います。従って私共が、生活を通しての地域の歴史をというのは、大字を単位とすることによって出てくるのではないかと思っております。

ただ、大字であれば非常に細かいことが何でも出てくるかといえば、実はそうではない場合もかえってあると思っています。大字であるために書けないこと、

言えないこともあります。ですから、かえってよくやりますように、例えば経営史の単位であったら書いてあるのに何で大字で書いていないのかという事例は出てくると思うのですね。もっと詳しいことがあるかと思うと、実は何もふれていない場合があるという限界がある。そういう場合があるのですが、私としては集落は生活空間の基礎地域だと考えれば、その中のものをまず明らかにすることが大事だろうと思います。

最近は地域論では小学校区単位でということを、東京大学の吉田（伸之）さんたちと一緒に研究会をして、そういう話をしたりしています。小学校区単位とかあるいは公民館の単位であるとか、いろいろな単位の取り方があるかと思っておりますが、それはそれぞれの地域で議論して考えていけばまた新しい発見があるのではないかと考えています。

司会：ありがとうございました。石松さん、小学校区を対象としたらどう変わったかという話をいただければと思います。

石松崇（加美町教育委員会）：もともとこの「ふるさとガイド」は、後ろのページに学年や組、名前が書けるようにしています。先程、地域の方が入ってという言い方をしましたが、最初にお声掛けをするのは小学校の校長先生に話を持って行っています。小学校の校長先生から担当の先生と校長先生も出てきていただいて、小学校の学校教育の中で使っていただけるような資料を対象として考えています。ですから、先程も何回か話が出てきていましたが、総合的な学習の時間等で活用していただいているようなことです。

先生から小学校区というという話がありましたが、便宜的に今は小学校区なのですが、加美町の場合は昭和 30 年代に合併する旧村単位が小学校区とほぼ一緒なのです。ですから、小学校区とは言いながらも、昭和 30 年代に合併する以前の村の単位であるので、地域の方々も地域に対してそれなりに愛着があるという現実もあるのかなと思っています。

司会：もう 1 つ共通している論点に話を移したいと思います。1 つはずっと出ていますように、次の世代に未来を継承するということでございます。あるいは坂江さんのお話の中でありましたように、横のつながりを広げていくお話もありました。閉じられた組織ではなくて、どんどん開かれていって新しい方が参加できるようなものにしていくと。今、大字という話がありましたけれども、旧村の住民だけのメンバーシップでやるのではなくて、もうちょっと広げていくことが大事なのだと思いました。吉田（ふみゑ）さんのお話の中で、親しみやすいところから入っていただくということがあったかと思います。そういう、新しい世代へも含めてどうやって広げていくか、伝えていくかという、新しい共同性について議論していきたいと思います。

石松：新しい世代に広げていくという中で、なぜ小学校の教材として使ってもらえるようなものを作ることを第一の目的にしたかと言いますと、実際に文化財や遺跡の説明会をすると、来ていただけるのは高齢者の方ばかりだという現実があります。どうして 30 代・40 代の、いわゆる子育て世代にそういうに興味を持っていただけないのかな？という中で、子ども相手の事業をするとお母さんなりお父さんが付いてくると。ならば最初から子どもを狙ったほうがいいのではないか？ということで小学校を活用したわけです。実際に、これを使っていく中でもう 1 つあった狙いは、先程はお話ししませんでしたが、これは全戸配布しています。私共の思いでは、これがこたつの上にぽん、と置いてある。子どもが「ゲームばかりしてたらあかんぞ」と怒られて何もすることがないからそれを開くと知らないことがいっぱい書いてある。そこにいるおじいさんに聞いてみるとおじいさんが答えてくれる。それを横にいるお父さん・お母さんが聞いてくれるというような活用の仕方ができないかと。最初はやはり、どうしても関係ないと言うか入っていただけない 30 代・40 代を仕掛ける方法としての 1 つのツールであると考えています。

司会：他にいかがでしょうか？

齋藤瑞穂（新潟大学災害・復興科学研究所）：今、私共の方で「被災地の地域を知ろう」をテーマとして、被災地のコミュニティを再構築しようという無謀なことを考えています。そこで吉田さんにお尋ねしたいのですが、常民学舎の会員の年齢層の割合が 1 つ。それから、100 人ぐらい減ったというお話もあったかと思いますが、どういう理由でどの年代が増えたり減ったりしているのかを教えていただければと思います。

吉田ふみゑ（常民学舎）：27 年前、バブルの前にできました。その頃は 40 代から 70 代の方が本当に多かっ

たのですが、やはり人間関係みたいなところで皆さん集まってこられていたので、1 年限りというような方が多かったのです。その 1 年限りの時に会費が年 3000 円だったのですが、ご祝儀も含めて 5000 円とか 1 万円とか出されたのではないかと、私は思います。帳面を見るとそういうふうになっております。お金ばかり余りまして、3 号ほどで続かないと言うか運営ができなかったようなのですけれども、お金がある状態で会が解散するわけにはいかないので、本だけは続けていこうみたいな感じ。その本が今日まで続いてきているわけで、行政や教育委員会、公民館が一切関わらないで作ってきましたので、助成金も何もありませんし、お金は本ができてから集金に回って、次の本を作るお金ができる。次の本を作るお金ができるから本を作って、本代を払ってしまったらもう全然お金がないからまたお金を集金して回って本を作るということを、よくもまあ続けて 53 号まできたなという感じなのです。

どんどん会員がやめていかれたり亡くなっていかれたりしましたけれども、不思議なことに 90 歳を過ぎても本が来ることを、会費を納めてこういった地味な本を支援することで若い人を支援したいという立派な方が何人もおられるのです。「あんたが書いたから、バスに乗らせてもらって行っても遠慮せんと行ける」と言って来てくださる方々に、私たちは元気をもらっているのです。そういう方たちを見ることで、小さな会ですけれども、お互いに生き方を学び合っていけるような会になってきたということです。

今は、40 代はいません。50 代と 20 代の若い人が書き手になってくれています。福崎高校で教師をしている難波正司さんが会長なのですが、20 代の会員はその教え子です。教え子が 2 人おりまして、こういった会に関わってくれて。1 人は女性なのですが、彼女は京都の学校に行って、そこで指導教授から「環境問題を考えるなら、都会ではなくて自分の田舎を考えなさい」と言われて、「そうだ。外に目を向けなくても自分の地元にこんなに素晴らしいものがあったのだ」というので帰ってきて、会に参加して書き手になってくれている。彼女がいてくれるおかげで友人を連れてきてくれると若い子が来る。だから 1 人加わるだけで 3・4 人増えるということがあります。それから交流するところで、若い 20 代・30 代の人たちが全くいないなと思っていましたら、こういった手書きの新聞を作っているのですね。こういうことにつながっていくというのは、20 代・30 代の若い人たちと交流を持つからこそ、若い人がやっているということが分かるのです。本当にこういった、本を読んでくれる人たちというのは本当に 50 代から上なのです。先日、坂江先生編の本の著者を見ましたら 1960 年代・70 年代生まれの方がほとんどなので若いなと思って見ました。大学院というところは若い先生方がおられるのだなと思いました。一般はそうではありませんが、地道に活動することによってつながっていくのではないかと、最近になって信じるようになりました。それまでは、30 代からやっていますから自分が若いと思っていたのですが、気が付いたら皆、自分より年下の人になってきているということは、皆若いなと思ってみてきているのですが、いかがでしょうか?

あまりお答えできていないと思いますが、人数的にはきちんと把握していないです。なぜかと言うと、会費をいただくだけで何歳の方かということが分からない場合もありますから。

齋藤：若い人の獲得が重要なことを学びました。ありがとうございました。

司会：吉田さんのお話は、落合さんの研究者と一般読者の調和の話と少し重なるところもあるかと思います。大国さん、いかがでしょうか?

大国：神戸史学会はそういう意味では閉じられているなと思って、吉田さんのお話を興味深く拝聴しました。うちの会を最近やめられる方は、目が悪くなって読めなくなったというのが圧倒的に多い原因です。若い方をこれからどう勧誘していくのかというのは、いろいろと中で話をしていますが、やはり限界がありますね。1 つは定職になかなか就きづらい、就いても任期制で変わっていってしまう。遠方に行ってしまうという方で、どうしても地域的な限界を感じます。『Sāla』みたいにあまり地域にこだわらないというところに比べますと、やはり神戸中心に、兵庫県という 1 つのエリアをがっちりと固めている以上、なかなか遠いところの分については展開しづらいところにあるかなと思います。

この会自体の意味を、我々自身がもう少し広く訴えていく必要があるのかなと感じております。

司会：ありがとうございました。

時間の都合で最後の論点に入りたいと思います。本日の副題が「目的と支援を問い直す」ということで、

さまざまな新しい民間の動きが出てきている中で、行政や大学はどういった役割を果たすかということが重要です。あるいはどういった役割を求められているかについてご意見をいただきたいと思います。

松下（正和）さんから「大学の役割について、自治体の枠を超えた連携（大阪）や大学間連携の事例など、大きな枠組みの方向性についてプランはないのか」というご質問が出ています。松下さん、補足などございますか?

松下正和（近大姫路大学教育学部）：今日のお話は、地域を超えたつながりですとか、あるいは世代を超えたつながりということで、非常に沢山の興味深い事例をお聞きして、私自身非常に勉強になりました。私自身ずっと神戸大学で、それこそ地域連携センターで地域の皆さんにむしろ育てていただいたと言いますか、先程「調和」という話がありましたけれども、教えるというよりむしろ教わってここまで成長させていただいたという思いがあります。本当にこの間、神戸大学がずっとやってこられた活動の大きさを改めて感じながら聞いておりました。

勿論、地域を超えたつながりということで字誌の――ちょっと今日はあまり出なかったかもしれませんが、字誌を作っている方同士が交流するというパターン。大槻先生のレジュメにもありましたけれども、棚原の皆さんと福崎の皆さんですとか、あるいは神戸大学の皆さんが交流するというパターンもありますし、『Sāla』の話しも 1 つの地域というか、播磨を基盤としているのですけれども、非常に沢山の地域の方々が交流している。そういう地域を超えたつながりがある。世代を超えたつながりという話も先程来ありました。

行政で大阪と書いたのは、先日、「小さいとこサミット～小規模ミュージアムのつどい～」がありまして、大阪府高槻市の芥川緑地資料館（あくあぴあ芥川）の方が報告されていました。小規模館同士がネットワークを作る。佐用町昆虫館の話も出ていました。そういう、行政の枠組みを超えて小規模館が連携するという行政のあり方もありました。ですので、県内でそういう動きがありましたら教えてほしいです。

あと、坂江先生の報告に対する質問だったのです。レジュメ 10 ページで「行政の側のはたす役割」というところで話を終えられました。このような資金もありますし、お金を採ってくださいねということなのでしょうけれども、一方で大学もどのような役割を果たすことができるか。勿論、神戸大学は地域連携協議会をこの 10 年ずっとやっておられたということもありますし、一方で大学間連携という話もあろうかと思います。「大学コンソーシアムひょうご神戸」ということで、大手前大学ですとかいろいろな大学とやってきたことがありますけれども、そういう、地域を超えた広がりに対して坂江先生のほうで大学が持つ役割ということについて、何かありましたら教えていただけないかと思います。

司会：まず坂江さんにお答えいただきまして、博物館の交流ということで小栗栖さんにお願いしたいと思います。

坂江：今まで、県内の大学同士の連携は個別にはいろいろとやってきましたし、松下さんともたつの市や宝塚市でやってきましたので、それを続けていったらいいのではないかというのが率直な感想です。あまりがんじがらめにすると、得手・不得手や条件もありますし、大変な面も出るのでいろいろと考えながらやっていきたい。これは実績を積みながら方向性を考えるのが妥当だと思います。神戸大学地域連携推進室でいろいろと考えておられるようですし、それは奥村先生からご意見をいただければと思います。

それから、大学の果たす役割でちょっと思ったのは、先程の議論との関わりで言うと、若い力をどう引き出すかということで、今は小学生・中学生はあると。もうちょっと上はないかということですが、やはり大学の持つ 1 つの役割は、大学生という若い人がいるわけで。その人たちをいかに地域と関連付けるかというのは重要だなと。神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターでは「地域歴史遺産保全活用基礎論」という座学はやってきているのですがあまり外に出ることはやっていませんでした。去年から個別にボランティアを募ったら 2・3 人来てくれまして、結果的に地元の方がものすごく喜ばれました。特に女子学生が聞き取り調査をするとものすごく、僕らと違った反応が返ってくる。（会場の笑いを受けて）これは変な話ではなくて、どこに行ってもそう言われます。「男が質問したらあかんねん」ということも言われましたし。変な話ではなくてね。

この間、農学部のフォーラムが篠山であったのですが、農学部は土地と関係しますからすごい人数が現地入りするのですね。農学研究科の地域連携センターでは神輿担ぎなどにも学生が関わっていて、ものすごく

活性化するのです。そういうことも、大学が若い力、小学生・中学生ということ以外に果たす役割の 1 つではなかろうかと思います。ですから、近大姫路大学でもぜひいろいろとやってもらったらいいし、僕らもやりたいと思います。

小栗栖賢治（兵庫県立歴史博物館）：今の質問につきまして、県立博物館の立場でお答えしていくのがなかなか難しいところが沢山あります。今日、私が報告しました分というところでお話をいたしますと、ひょうご歴史文化フォーラムという仕事の中で、やはり地域連携と言いますか、県立博物館と兵庫県下の地元の教育委員会との結び付きというものを強く持っていきたいという中で事業といたしまして「ひょうご史最前線」というものを組みまして。そうした中でそれぞれの身近なところに、道や田んぼを歩いている中にという身近なところにいろいろな歴史があるということを知っていただこうというのが 1 つ、県と市町との関係・連携の中でそういうことを実現できないかと思っていたわけです。

それと、博物館は来年度満 30 周年を迎えます。その 30 年という歴史を見ていきます中で文化財、歴史資源の発掘という立場で博物館のあゆみを振り返っていきますと、県立博物館は最初、開館した頃は博物館独自で総合調査という、文化財の悉皆調査をお寺でありますとか地域でありますとかを対象にやっていました。最近は財政事情等が厳しい中で、それが中座している部分がありますが。実はその事業といいますのは、私共博物館の学芸員が現場に出ていくわけなのですが、その一方でそうした総合調査は地元の教育委員会の方、そして当初は地域で歴史研究をされている、郷土史研究や地域史研究をされている方々と一緒にやっていました。今、文化財や歴史を取り巻いている中、そして歴史資源の将来への継承を振り返ってみますと、やはりそういうオーソドックスというか、非常に地味な仕事ではあるのかもしれないけれども根本的な仕事をもう一度、博物館そのものもそうですし、行政の中での歴史研究、文化財調査、文化財保護、そういうところをもう少し全体的に、大きく見直していく、考えなおしていく時代が来ているのかなと、今日はいろいろなご報告を聞きながら感じていました。

博物館がどこまでできるかは分かりませんけれども、今日は博物館を主管されている文化財課の課長も来られていますので、今日のご報告を聞かれて感じられた部分も沢山あったのではないかと思います。余分なことも言いましたけれども、以上です。

司会：ありがとうございました。本当はもう少しフロアから質問を受けたかったのですが、だいぶ時間が超過してしまいました。最後にコーディネーターの奥村から話します。

奥村：最後に一言です。1 つは私たちもやはり、先程少し変な質問をしましたが、やはり地域の歴史や文化に携わる人たちが元気でないと、地域の人に対しても訴える力も弱いし、もっと言えば行政や大学や全国に対して訴える力も弱いと思うのですね。では私たちは何で、どうしたら元気になれるのだろうかというところが今回の大きなところで。私たちはどうして、その地域を調べ・学んでいくのか。そういうことに対して支援していくことを含めてどのようにしたらいいのかという関心から、私自身も聞かせていただきました。

今回お聞きしていたら、さまざまな場所で、いろいろなことをやる時に「地域」や「社会」のイメージがすごく広がっていくことの楽しさというか面白さということが根幹にあるような気がするのですね。しかも、歴史に関する広がりや深さのイメージが、単に自分の中で深まるだけではなくて、いろいろな方とのつながりの中で広がっていく、深まっていく。そして新しい活動のスタイルをさらに考えていくとかという楽しさと言うか、そういうところにこの活動の持っている楽しさと言うか一番重要なところが、学んだり調べたりする中にはあるのかなということを再確認させていただいた気がします。

そういう、豊かな広がりやつながりをどうやって作っていくのかというところで、1 つは先程出た若い世代と、それから、私も中高年層のところをどうするかということがあって。これはいろいろな努力があるのだなと思いました。ここはまた協議会の中でも例えば、最近出てくる学校教育の現場との関係をどうするか。今日は中学校の話が出ていましたが、私は中学校もかなり厳しいと、いろいろな先生を見ていて思います。カリキュラムの中で地域のことをやる時間がなかなか、現実にはほとんど存在しないというのが実態だと思います。先程、坂江さんからもありましたけれども、それを入れようと思うと校長に対して本当にお願いをしなければならないほど、大変なところもあると思いますし、高校はまた違った状況がある。このことは大事な問題です。

それからいつも自分らに返ってくるのですが、大学

の学生さんたちが社会に出た時に、ずっと歴史に関して関心を持ち続けることが。例えば歴史関係の学部生の皆さんだけでも全部、全国でその関心を維持し続けてくれれば相当なものになるのですけれども、どうもそうならないのは誰の責任か？というとやはり大学の先生の責任だと自分で思ってしまうところがあるのです。そこの広がるイメージやつながる関係の社会の中に入っていかなければ、一人でなかなか続けることができないというのがあるのですね。ですからやはり、そういうところにどうやって入っていくかということが課題で。おそらく神戸史学会の人数を増やしていくとか、県立博物館のサポーターが増えていくこととか、今日も沢山来られていますけれども各地の友の会に若い方が入って来られるというところを、やはり意識的に考えていかなければならないと思っています。歴史資料ネットワークと神戸史学会は大学を超えて地域史の卒業論文報告会をやっています。自分たちの学んだことを社会にいる人たちに聞いていただいて批判を受ける、ということで学生にとってもすごく刺激的な内容になっています。これは私たち自身の問題として考えていかなければならないと思っています。

3 つ目に、少しだけ小栗栖さんがふれられた問題です。今日、県立博物館の取り組みの大変だったことをかなり率直に語られたので、すごいな、と思いました。本来であれば地域の団体を連携させる。それが無理だったら地域の、兵庫県各地で研究している個人をつかまえるというふうに順番に努力されるのですがそれが上手くいかないのはなぜかというのは、一方では私たちがその地域を調べたり学ぶ上でかなり深刻な問題提起であるような気がするのですね。やり方が悪いという問題ではないというふうにお話があったのではないかと。少し考えてみますと、かつての郷土史を研究する方々は、兵庫県内でそれぞれの地域を研究すると共に、兵庫県全体とか、そこまでいかなくても播磨全部とか、かなり広いレベルの個別の研究をされているような方々が沢山おられました。おそらく、神戸史学会もそういう方々と連携してつなげていく形で兵庫県全体の歴史を明らかにしていくというスタイルを採っていらしたのだろうと思います。そういう形の研究者がだんだん減ってしまっている中で、では、そこの分野は要らないのかということだと思うのです。要るということで、県立博物館の努力があったのではないかと考えたほうがいいのではないかと、私自身は思っています。そういう広い視野でもって県域の中で研究している研究者をどうやったら増やしていけるのかと言うと、これはなかなか難しいのですが、やはり考えてみますと地域の博物館におられる学芸員の方とか、それからそれぞれの大学におられる方とか、それから高校の教員で頑張っている方とか、そういう意味で自分の地域に目を向けるだけではなくて、もう一度幅広く兵庫県や日本全体の中での位置も含めて地域の意味を問うという、研究者としての視点を一方で持ち続けていただけるのが、逆に地域の中では重要な時期に入っているのではないかと思うところがございます。やはり一方で、兵庫県内での歴史研究とかが変わらないと、地域の市民の方々の歴史の調べや学びが深まっていかないと思いますので、そういうところでやはり、地域の歴史文化に関する専門家の皆さんと言われている方々、私たちも含めてそこがどれだけ地域の中の歴史を深く、いち早く明らかにするかというところも大事かと思いますし、そういう点で、先程、県の調査が昔、地域と結び付きながら文書の調査であるとか歴史のイメージを作っていくためのいろいろな研究をされていた機能が今はないのが、一方では非常にさびしい感じが私もしております。そういうところをもう一度どう作っていくかということが、一方で私たちの大学の役割でもあるのではないかと思っております。これはさまざまな県の機関の方とも協力しながら、大学としても展開していきたいと思っています。

それから一方で、先程松下さんから、地域の大学の連合でやれないことはないかという話がありました。今までもいろいろな形で大学が――例えば、神戸大学は皆さんご存知のように考古学がございません。ですからうちの大学でどんなに頑張っても考古学でやれることは知れています。いろいろな方にご協力いただきながら、大学間でもそういうのを作っていくとか。それぞれの大学で言えば時代ごとの研究者とか民俗の研究者とかは非常に少ないわけですので、その人たちが皆さん集まっていくようなスタイルを採っていく必要があるということで、全県的に大学間で歴史文化に関わる方が集まりながら話を進めていこうということで今少し、私たち神戸大学もそのきっかけ作りは頑張ろうということで、この 4 月ぐらいから展開しております。ただなかなか力不足で、資金不足ということもありまして十分ではありませんけれども、そういう形で大学としても動いていくつもりで頑張っていこうと思っております。

あまり「頑張ろう」と言っているとしんどいので。やはり楽しくと言いますか、面白く、イメージを広げて、つながりを広げて何ができるかと考えていったほ

うがいいかと思います。この協議会もその機会にしていただけたら。今回、今までで一番沢山の人に来ていただきました。本当にありがとうございました。そういうことで、この協議会だけは何があっても年に 1 回やっていきたいと思っていますので、今後とも協力のほど、よろしくお願いいたします。以上です。（拍手）

司会：本日は 79 機関 109 名の方にお越しいただきました。なかなか時間がなくて、議論が尽くせなかった部分がございますけれども、長時間ありがとうございました。

〔付記〕本協議会の開催にあたり、今年も神戸大学文学部同窓会（文窓会）から特別に開催支援金を賜った。ここに厚く御礼申し上げます。